

塩谷郡市医師会編

幕末・明治・大正期の  
医療

塩谷の地から「醫」をさぐる



『幕末・明治・大正期の医療 塩谷の地から「醫」をさぐる』

第二部 昔々の医療事情

く人びとはどんな医療を受けたのかく

第二部担当 戸村光宏

ネット版によせて

『幕末・明治・大正期の医療 塩谷の地から「醫」をさぐる』を栃木県の塩谷郡市医師会から発刊したのは二〇一六年のことである。

幸い、一地方の医療史としては望外の評価を得ることができた。さらに

二〇一八年五月には、国立国会図書館の月報に「本屋にない本」として、書評が掲載された。若手職員がぜひ紹介したいということだったそうである。書評を見て、共著者の岡一雄医師（第一部担当）と第二部担当の私はいへん感激したことを告白せざるを得ない。

すでに『幕末・明治・大正期の医療』は在庫が尽きて新たには手に入らない。再版も予算の関係でできない。そこで、第二部だけでもネットで公開しようと考え、PDFで自分のホームページにアップすることにした。

アップするに当たり、いくつかの事実誤認や字の間違いなどを訂正してある。また、PDFでも読みやすいように大きなフォントにし、さらに振り仮名や地図を追加して供覧の便を図った。

第二部は、実際の医療内容に立ち入るので、デリケートな問題も含むのだが、当時の医療事情を後世に残すという意味もあるので、一部伏せ字にして記載してあることを了承されたい。また、筆者のかなり個人的見解も含まれるので、その点もご容赦願いたい。

次ページからは、幕末明治大正期の医療』の目次と本文になります。

第二部のはじめとして「までがこのファイルにあります。

第一章からは次のファイルになります。

## 第二部 昔々の医療事情　く人びとはどんな医療を受けたのかく　目次

### 第一章 明治・大正期の西洋近代医療　く喜連川病院の検案書・診断書綴りよりく

#### 第一節 子供の医療

##### 一 子供がジフテリア

##### 二 小児の診断書　く子供は何故死んだのかく

1 子どものための品々続々発売

2 もらい子・捨て子・乳児死亡率

3 死亡診断書による五歳未満の死亡原因

☆生後数日での死亡は／☆嬰兒營養不給症について／☆脳水腫は水頭症だったのか

☆脳膜炎／☆胃腸炎での死亡／☆遺伝梅毒

4 死産証書

☆出産は産婆／☆嫡出子庶子私生子ノ別

5 子どもが働く

#### 第二節 娼妓の診断書

##### 一 売春が合法的だった時代

##### 二 病気がちの娼妓

1 子宮内膜炎は梅毒、咽頭カタルは？

2 入院した娼妓

3 診断書の数

三 娼妓になるための診断書

附・病気がちの娼婦の詳細とその後のことなど

### 第三節 精神神経科的疾患

一 監置患者は癲狂病

二 精神神経疾患の治療と病名  
く大正二年一月から二月

三 当時の脳充血は

四 神経衰弱の診断書

### 第四節 その他の疾患について

一 性感染症について

1 花柳病が公用語

2 娼妓検査

3 花柳病の治療薬

二 肺結核のイメージと内服薬

三 脳溢血のことなど

四 心臓弁膜症・心内膜炎

五 死因となったその他の疾患

☆癌／☆腎臓病／☆消化器疾患／☆老衰

附・二十世紀初頭、人々はどんな病気になっていたのか

☆眼疾患／☆皮膚病／☆寄生虫病／☆嬰兒營養不給症／☆抜齒

## 第二章 江戸・明治期の漢方医療

### 第一節 漢方薬のききめ

### 第二節 明治以前の漢方医学

#### 一 漢方医学の流れ

1 玄白の医学感

2 医学は道三から

3 明治政府の漢方排除の影響は今日に至る

#### 二 江戸期・堂下村の乾林堂

1 家伝薬く製造と販売

2 寿命録く診療の記録

☆使われていた薬剤など／☆診療した記録くたたりも治した？／生薬の仕入れ先  
3 青木家の漢方の流派は古方派であったのか

### 第三節 塩谷郡の明治期の漢方治療

#### 一 道下村・青木泰次郎の診療記録

1 書状での診療依頼く陰囊全体が…

2 患者は県に届け出られた

3 死亡證と死亡診断書くいつから始まったのか

☆施治患者死亡届／☆死亡届／☆死亡診断書／

☆漢方医と西洋医の死亡診断書の違い

4 日露戦争と安虫丸

附・幸岡出張所のこと

二 コレラ大流行・明治十五年の診療記録

1 齋藤仁重郎の報告書

2 押上村・桜井元善の診療記録

### 第三章 大正から昭和にかけての医療

一 スペイン風邪の猛威 その治療は

二 結核の注射療法は如何になされたか／結核治療費請求控より

三 胃癌の診断

四 血圧に対する認識

五 日本内科学会雑誌の広告から覗う医療

\*PDF版の附録「文久2年のカタルシス／喜連川神社の御輿渡御図の研究」

\*『幕末・明治・大正期の医療』の表紙にある喜連川神社の額絵について、  
マニアックに分析した文書。

氏家喜連川 歴史と文化 第16号（2017年5月21日発行）に発表  
したもの。



## 第二部のはじめとして

江戸時代、医療に携わる者として、多くの漢方医と少数の蘭方医が存在していた。明治になってドイツ医学の習得が医師を志す学生の絶対条件となり、医学教育から漢方医学は薬方ともども放棄されてしまう。以後、ほぼ一世紀にわたり「良識ある医学者」から漢方は無視され続けてきた。第二部では、それぞれの医学が、往時どのような治療を行い、人々はどのような恩恵を得たのか、あるいは得られなかったのかを、残された資料をもとに具体的に述べてみたい。

さくら市ミュージアムにデジタル化された「佐野哲郎家文書（以下佐野家文書）」がある。さくら市（旧・喜連川町）にある佐野医院は、明治から昭和三十一年まで喜

連川病院という名称であった。「薬師商兼漢方医であった齋藤仁重郎が長男の邦一郎のために造った」と邦一郎の曾孫である佐野哲郎現院長は言う。このことは「第一部第五章」「第三部第二節」に岡と佐野が詳述している。「佐野家文書」には、明治三十一年から大正、昭和それも第二次大戦後までの医療に関する文書が多数含まれている。これらの貴重な史料から、当時の近代医学がどのような医療を行っていたのか具体的に知れる。一方で、その前の時代の医療関係の資料は少ない。明治十年代の医療関係の文書は、齋藤仁重郎発行の診断書類、鷺宿村の笹沼玄朝の患者「御届書」などが佐野家の親族である喜連川の「齋藤家文書」から見つかる程度である。それだけでも当時の医療状況が少しは分かるのであるが、しかし、幸いなことに同ミュージアムには「青木マサイ家文書」があり、デジタル保存もされている。青木家は道下村（現・塩

谷町道下)で江戸時代から明治四十五年まで代々漢方医をしていた家である。明治ばかりでなく江戸末期の医療、特に漢方治療がどのようになされていたのかが、この文書により読み解けるのだ。また「長嶋厚樹家並びに長嶋元重氏収集文書(以下長嶋文書)」から押上村(現・さくら市)の漢方医・桜井元善の診断書類が最近デジタル化され、明治十五、六年頃の漢方診療の実態をさらに知ることができるようになった。第二部ではこれらの史料をできるだけ読み解いて、実際の診療内容を振り返っていくことにする。

#### 凡例

第二部では、( )は筆者、≪≫は原著引用。旧仮名遣い・旧字体はできるだけ避けたが、一部原文のママもある。原著のカタカナ文を平仮名に改めたものもある。